日刊 動労千葉

81.8.8

No.816

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一-八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四三(22)七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

鉄労以下の新マル生分子＝「本部」反動分子・土屋一派を解体一掃しよう！

告訴→不当逮捕攻撃うちくだいた十七日間闘争
――勝利の教訓と闘いの方向について

「本部」反動分子は、自らの路線的破産からくる動労千葉との組織争闘戦の敗北を、権力の手を借りてばん回すべく、「6・12津田沼事件」をデッチ上げ、「告訴・告発」という労働運動にあるまじき手段に出てきた。

権力は、この「本部」反動分子の哀願を絶好の機会として、七月十五日、本部、津田沼支部事務所および六名の組合員宅合計八ヶ所への強制家宅捜索、六名の不当逮捕という挙に出てきた。しかし、この権力とその尖兵・「本部」反動分子一体となった動労千葉破壊策動は、十七日間の動労千葉の断固たる闘いによって完全に粉砕された。

われわれは、この闘いが、激動の八〇年代労働運動の八〇年代労働運動にとって避けて通ることのできないものであることをしっかりと見据え、十七日間の闘いを教訓化し、全体化してゆかなければならない。

勝利の核心点

勝利の核心の第一は、不当逮捕された六名の仲間が完黙、非転向の闘いを貫徹し抜いたことである。

この不当逮捕に至る敵の目的が、唯一、動労千葉をツブすという政治的狙いにあったことは、「組合を脱退しろ」「役員をやめろ」という転向強要を主体とした取り調べ内容によっても明らかであり、このような敵に対し、完黙を貫き通すことこそが正しく、勝利のための唯一の道なのである。

勝利の核心の第二は、文字通り総決起し、暫定執行部を確立し、十七日間籠城体制で闘い抜いた津田沼支部の闘いである。

「全員が活動家になろう」という津田沼支部の決意と闘いは、かって、マル生粉砕、船橋事故闘争勝利、三里塚・ジェット闘争貫徹をかちとってきた動労千葉の路線的正義性を体現する闘いであり、「いつ、いかなる時も」総決起できる動労千葉の組織力を示してあまりある闘いであった。

勝利の核心の第三は、動労千葉一三〇〇名組合員の総決起である。

千葉刑激励、抗議の街宣、7・15抗議緊急集会、7・17地裁、7・23勾留理由開示公判、7・30千葉刑包囲激励、さらには、署名、カンパ獲得へ、実に、この十七日間に、差し入れ、家族対策を別にして千五百名を超える動員がかちとられている。

この間の動労千葉の闘いが培ってきた組織力がいかんなく発揮され、不当逮捕された六名の闘い、津田沼支部の闘いを先頭に、一丸となって闘い抜いたことが、この緒戦の勝利の全てであると言っても決して過言ではない。

新マル生粉砕の職場闘争をまきおこせ！

われわれは、この緒戦の勝利を突破口に、不当にも起訴された三名の裁判闘争勝利へ向けて闘い抜かなければならない。

第一の闘いは、

労働者階級の敵にして権力の手先、憎みても余りある「本部」反動分子とその追従者土屋一派追放一掃の闘いである。

4・17津田沼支部襲撃で片岡支部長以下に頭蓋骨骨折等の重傷を負わせ、権力・警察と一体化することを当然であると居直りながら「当り前の労働運動」などというペテンをもって生き延びようとする「本部」反動分子を許すな。

十名を告訴したということは、「告訴→裁判→有罪→解雇」という形で、権力の手を借りて十名の仲間を職場から排除しようとすることなのである。そのような労働者の敵＝「本部」反動分子・土屋一派に情は無用である。

第二の闘いは、

「本部」反動分子・土屋一派の「職場規律の厳正」要請をテコに当局が推し進めようとしている新たなマル生攻撃を粉砕することである。

徹底した職場闘争を全職場からまきおこし、鉄労以下の新マル生分子＝「本部」土屋一派解体一掃へ向けて奮闘し、この職場生産点からの闘いを基礎に、裁判闘争勝利をかちとってゆこう。

「本部」反動分子は告訴という形で権力に泣いてすがる以外に手段をなくしているのであり、追い込まれているのであり、動労千葉の勝利は歴史の必然である。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！